

日本山岳会への提言

近代アルピニズムを超える 方向は何か

四手井靖彦

日本の登山界をはじめ山岳会の停滞の原因はどこにあるのか——。その最大の原因が初登頂の終焉にあると考える四手井靖彦氏は、今後の山岳会の方向性を探ってもらった。

日本山岳会は多くの問題をかかえていると言われる。その最大の問題点は本多勝一氏が指摘している登山とパイオニアワークの關係に尽きる。パイオニアワーク、登山で言えば初登頂の時代が終わって、登山界は大きな転換期にある。その後の方向性が定まっていない

のだ。それが、いまの日本山岳会の低迷の根源にある。

ヨーロッパに興った近代アルピニズムは、言わばアルプスを舞台にした初登頂競争であった。登山の価値は初登山にあつたのだ。アルプスの未踏峰がなくなると、ヨーロッパからヒマラヤ、カラコル

ムの時代に移る。そして、ヒマラヤ時代に登山のパイオニアワークは頂点に達し、やがて終焉を迎えた。

1950年にアンナプルナーI峰がフランス隊によって登頂されたのがヒマラヤのジャイアンツ登頂の幕開けであつた。1950年代に多くの8000m峰が頂上を明け渡し、最高峰エヴェレスト(チモランマ)は1953年に英国隊によって登頂された。これは登山界にとって象徴的な出来事である。世界最高峰の初登頂という登山家の大きな夢が達成され、同時に壊れたのである。日本隊も1956年、3次にわたる遠征の結果、マナスル初登頂を手にした。

「チベットあたりへ行けば、まだ

魅力的な未踏峰はある」と言う人がいる。確かに、未踏峰がすべてなくなつたわけではない。それを求め続けるのは、近代アルピニズム信奉者の一つの生き方である。だが、それは今西錦司氏風に言えば、未踏の8000m峰がなくなつたあとの「落ち穂拾い」ではないだろうか。すでに命運は尽きているのだ。エヴェレスト登頂は人類の到達した輝ける偉業であると同時に、初登山時代の終わりを象徴しているのである。

初登山時代の終焉は近代アルピニズムの終焉も意味していた。登山界は共通の目標を失つた。試行錯誤の時代に入ったと言えるかもしれない。先鋭的登山を目指すものは、より困難なバリエーションルート、アルパインスタイル、無

Mapion: [HOME] ▶ 2/20

酸素登山の方向を目指し、一方で「百名山」をテーマにする中高年の登山者が増加した。いま、日本の山はおるか、海外のトレッキングを席卷しているのはこれら中高年登山者である。

登山の形態も細分化した。フリークライミングという新しい分野が生まれた。競技的要素の強いこのスポーツの舞台は、自然の岩壁から人工壁に移行しているように思える。「ピークには興味がない」と断言するフリークライミング愛好者を知っている。山とは関係のない人工壁登山と言えるだろうか。雪上歩行の道具であったスキーが登山に利用され、やがてレジャーや競技として発展したように、フリークライミングも登山とは別の、新しいスポーツとして歩むのではないかという気がする。山スキー愛好者も増えている。必ずしも山頂は目指さない。滑降が主たる目的である。驚くべきことに、近年はスノーシューを履いたスノーボーダーがかなりの高度まで登っているのだ。雪山を舞台にしたこうした新しいスポーツをどう評価し、どこに境界線を引くのか。

商業登山というこれまでなかった登山法も登場した。極論すれば、お金さえ出せば8000メートル峰に登らせてもらえるのである。1996年にエヴェレストで起きた大量遭難で生還したなかに、ニューヨークの社交界の花形女性がいた。携帯電話を持ち、後ろからシエルパに押され前から引つ張られて登頂した。これをヒマラヤ登山の變化と言わずに、何を変化と言いつか。この大量遭難の悲劇を描いた「空へ」の筆者ジョン・クラカワーは「いまやセブンサミッツは世界の金持ちの道楽になりつつある」と書いている。

マスコミの関心も変わる。新聞社はかつて初登山を後援し、近代アルピニズムを支える役割を果たした。新聞、テレビにとやて、ヒマラヤ登山には魅力がなくなった。7000メートル級には見向きもしない。いわんや、6000メートル級においてをやである。

マスコミは移り気である。大正から昭和の初期にかけては女流登山家もてはやされた。いまは最年少登山家とか早登りなどに関心がある。エヴェレストにどれだけ短時間で登れるかが大きな関心の

的になる。そして、それはマラソン競争のように、常に短縮されるはずである。

登山法の一分派として、早登りというジャンルが生まれるかもしれない。すでに富士山の登山競争があり、トレイルランニングという競技が脚光を浴びている。マレーシアのキナバルでも同様の催しがある。

大学の山岳部が衰退している。名門と言われた山岳部ですでに休部中のもがあり、多くの大学山岳部が存続の危機にある。時代の変化、趣味の多様化といった社会現象もあるが、パイオニアウエークの時代が去ったことと無縁ではない。学生が未踏峰のなくなった登山に興味を失ったのだ。パイオニアウエークは優れて知的な行為であり、それがかつての若者を惹き付けていたのである。

こうした登山界をとりまく状況のなかで、日本山岳会は何を目指すのか。その方向性が定まってい



1953年、マナスルに初登頂を果たした日本隊

ないように思える。会報からも未来への展望がうかがえない。マナスル一本化の時代があった。過去の栄光はよい。だが、それにしがみついているばかりでは発展がない。冠松次郎、木暮理太郎、横有恒氏らの名前を散見する。未来が見えないから過去を振り返る、沈滞の一つの現象ではないか。

それでも山へ行く人がいる。未踏峰はなくなっても、山がある限り登山愛好者はなくなるならない。有名なマロリーの言葉がある。新聞記者の問いに対して「愚問だよ」という意味での答えだと考えていた。しかし、「山があるから登る」を言葉通り、素直に受け取っても



立山・一ノ越を目指す高齢者登山隊（平均年齢67歳）。
後方は雷鳥沢のキャンプ地

よいのではないかと考えるようになった。「山があるから登る」人がいるからこそ、日本山岳会の今後の存在理由もある。

日本山岳会はただの山岳会ではない。歴史と伝統のある山岳会として先見性を示し、登山界において指導的役割を果たさなくてはならない。初登山時代が終わって、新しい時代に生き続けようとする場合、その目標を明らかにしなければならぬ。日本という国は終戦を機に民主国家へ生まれ変わった。新憲法を發布して、世界に向かってそれを宣言した。だが、登山界はそれをしていない。日本山岳会こそ登山文化の継承者として、

新しい登山、山岳会のあり方の方向を示すべきであろう。

登山人口が高齢化しているという。それが現実である。それにふさわしい方向を定めなければならない。永久不変の価値はない。桑原武夫氏は「登山とは文化行為である」と書き、メスナーは「芸術に近い」と語ったそうである。頂を目指すという登山の原点は捨てられないし、これら先覚者の言葉も重みを持つが、パイオニアワークの看板はもう下げてもよい時期が来ているように思える。

一つの方向は自然保護運動への係わりである。最も深く山に接し、自然を享受し、自然の価値を知り尽くした登山家が自然保護の啓蒙運動に立ち上がる。素晴らしいことではないか。すでに青森支部と白山山系、首都圏の高尾の森、岐阜支部の森づくり運動などの動きがあり、注目している。

最後に一つ具体的提言をしておく。支部活動のあり方である。日本山岳会は発足時から支部の活動を想定していない。定款を見ても、支部に係わる項目は一つもない。ということ、支部は「治外法権」

的存在なのである。

日本山岳会は1905年に東京で設立されている。京阪神における登山活動が発達になり、1935年に関西支部が発足した。当時、拠点を東西に分けるという構想で、関西が支部という存在ではなかった。県単位の支部ができるのは戦後になってからである。

今日、全国に25支部、今後も増えることはあっても、減ることはないだろう。やがて、一県一支部という時代がくるかもしれない。そういう時代にあつて、大多数の会員が支部を拠点として活動している現状にあつて、ますます支部の重要性は高まるであろう。

総会を東京以外で開催する試みもあるが、支部というものをいつまでも「治外法権」的存在にしていってよいだろうか。支部の形態、活動はさまざまである。独自の支部規約を作っている。会友制度など、はなはだあいまいである。調査しているわけではないが、先鋭的、スポーティアルピニズム追求型もあれば、地域色の濃厚な実直型、幹部の交代がないまま一部の委員のサロンと化した名前だけのような支部もある。

支部は独立機関ではない。あくまで日本山岳会の枠内にある便宜的組織である。そこにはある程度の均一性、同質性が必要ではないか。日本山岳会は単一の組織である。会員はすべて同じ権利を有しているはずである。一つの山岳会の中に、別の山岳会をつくってはいけない。支部による規制や、活動方針に大きな開きがあつてはならない。

閉鎖的体質を避けねばならない。すべての支部はすべての会員に開かれた存在であるべきである。IT時代と言われる。インターネットの利用者が全人口の60%を超えたというデータがある。インターネットを使えば、支部の情報は瞬時に全国の会員に伝えられる。

通信のみならず、交通体系も飛躍的に発展した。航空機を利用すれば、極端に言えば、日本中、どこへでも日帰りが可能である。各地の支部が同じ仲間として交流し活動する。高所における一部の会員の初登山に代わって、全国の会員が常に顔を合わせながら各地の山と地域の活動に結集する、これこそ日本山岳会の望ましい姿ではないだろうか。